

令和6年度第1回御前崎市総合教育会議・御前崎市牧之原市学校組合総合教育会議
合同会議録

日 時 令和6年9月27日（金）

午前9時00分～10時05分

会 場 御前崎市役所 3階 301会議室

- 1 開 会
- 2 市長あいさつ
- 3 協 議
 - （1）令和6年度 全国学力・学習状況調査の結果等について
 - （2）その他
- 4 閉 会

出席者名簿（敬称略）

市 長	下 村 勝
教 育 長	吉 村 紳 治 郎
教 育 委 員	竹 田 和 世
〃	島 田 恵 美
〃	松 林 義 樹
〃	馬 渕 香 澄
御前崎市牧之原市 学校組合教育委員	増 田 克 之
〃	松 下 充 利
副 市 長	鴨 川 朗
総 務 部 長	大 澤 和 也
健 康 福 祉 部 長	鈴 木 則 子
教 育 部 長	鈴 木 弘 康
学 校 教 育 課 長	古 地 隆
社 会 教 育 課 長	鈴 木 和 明
教 育 総 務 課 長	河 原 崎 聡 信
教育総務課課長補佐	坂 本 浩 長
教育総務課指導主事	神 谷 昭 吾

欠席者名簿（敬称略）

な し

1 開 会

○教育部長（鈴木弘康） 皆さんお揃いですので、始めさせていただきたいと思います。それでは開会に先立ちまして、挨拶を交わしたいと思いますので、御起立をお願いいたします。相互に礼。

〔相互に礼〕

○教育部長（鈴木弘康） 御着席ください。それではただいまから、令和6年度第1回、御前崎市総合教育会議を開会いたします。

この総務教育会議ですが、市長と教育委員会が教育政策について協議調整する会議体となっております。それでは次第に沿いまして進めさせていただきます。

2 市長あいさつ

○教育部長（鈴木弘康） 最初に下村市長より御挨拶をお願いいたします。

○御前崎市市長（下村 勝） 皆さん、改めましておはようございます。大変お忙しい中、この御前崎市総合教育会議、令和6年度の第1回ということで御参集いただきまして、誠にありがとうございます。

私自身もずっと教育畑を進んできたものでございまして、御前崎市の教育力がどんどん上がっていくということに非常に期待と熱い思いをかけているところでございます。皆様方におかれましては、日頃の御前崎市の教育に対する御協力、御支援、そして御指導をいただきまして、誠にありがとうございます。

今日は、非常に大事な内容となっております、現状の学力の把握ということでまずその点と、今後どうしていったらいいかの協議でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

3 協 議

（1）令和6年度 全国学力・学習状況調査の結果等について

（2）その他

○教育部長（鈴木弘康） ありがとうございました。

それでは、続いて協議に入らせていただきます。会議の進行は市長をお願いしたいと思います。

○御前崎市市長（下村 勝） それでは本日の総合教育会議は、今年度4月に行われました全国学力・学習状況調査の結果をもとに、御前崎市の教育課題について教育委員の皆さんと協議したいと思います。

それでは、全国学力・学習状況調査の結果について、事務局から御説明をお願いします。

○学校教育課長（古地 隆） 皆さん、改めましておはようございます。

それでは、今、市長からもありましており、この総合教育会議の中で全国学力・学習状況調査を振り返りまして、本市の児童生徒の状況等についてお知らせしていければと思います。よろしくお願いいたします。

お手元、カラー刷りの資料については、若干、以前に送付させていただいたものと、この1枚程度ですけど変わったものですから、そちらのほうを見ていただく、もしくは前のプレゼンが全く同じものになっておりますので、どちらかメモを取りながらでも結構ですので、御覧になっていただければと思います。

それでは学校教育課より、今年度実施した全国学力・学習状況調査の振り返り、市内の小・中学生の状況について御報告いたします。

今年度、4月18日に実施された全国学力・学習状況調査は、小学校6年生と中学校3年生を対象として、教科の調査は、国語、算数・数学の2教科、児童生徒の生活等について振り返る質問紙調査、この2つを実施したところです。

まず教科の調査平均正答率の結果を振り返りたいと思います。赤字部分が令和6年度、本年度の結果になります。小中学校とも国語、算数・数学、いずれも全国の平均正答率より低い結果となっております。小学校の算数については、全国の正答率と比べ5ポイント以上の差があるという結果となりました。

次に全体の平均正答率だけではなく、評価の観点別、本市児童生徒の状況、そういったことで振り返っていききたいと思います。評価の観点は、知識・技能で1つの観点、そして思考・判断・表現で1つの観点、合計2つの観点となっております。御覧ください。まずは小学校です。知識・技能と思考・判断・表現という観点別、二つの観点に分けて考えたときに、小学校では、実は国語、算数とも思考・判断・表現より、知識・技能の観点についての平均正答率が低い結果となりました。後ほど、どんな問題を本市の子供たちが苦手としているのか、課題としているのかということを振り返りたいと思います。次に中学校です。中学校では、小学校と反対の結果となり、知識・技能の観点は全国とほぼ同等であるのですけれども、思考・判断・表現については知識・技能より差が大きいという結果になりました。このことについても後ほど振り返りたいと思います。

続いて、今度は教科ごと、教科にはいろいろな領域があるわけですが、そういった領域や観点ごとについて比較してみたいと思います。まず、小学校の国語の知識・技能では、知識・技能の中には3つの領域とありますが、そういったものがあるわけなのですが、言葉の特徴や使い方に関する事項、我が国の言語文化に関する事項について、全国との差が大きいという結果になっています。中学校は、我が国の言語文化に関する事項の正答率が、全国よりも5ポイント以上、逆に高いか、問題によってはこういうような結果もあったということになっております。

次に、小学校国語の思考・判断・表現についてです。小学校、中学校とも、いずれも思考・判断・表現については、話すこと、聞くこと、それから読むことに課題があるということがわかっています。

次に算数の領域ごとの比較について説明いたします。国語では、知識・技能、思考・判断・表現が領域ごとにはっきりとわかれていたのですが、算数・数学は1つの領域の中に知識・技能、思考・判断・表現にわかれているため、ここでは領域別のみ分析して示していきます。例えば、小学校の数と計算、この中に知識・技能もあり、思考・判断・表現というような形でわかれていているということです。ここでは領域別に示していきます。小学校では、数と計算、図形の領域の平均正答率が低いことがわかりました。中学校では、図形の領域についての平均正答率が低いということがわかっています。

これは、教科に関する調査をまとめ、表にしたものになります。本市の子供たちが抱えている課題を、授業の中でどのように解決していくかということが求められます。

それでは、もう少し詳細に分析していきたいと思います。問題等を使って振り返りたいと思います。

まず、国語で良好な結果が見られた問題です。お手元に全国学力・学習状況調査の問題を配布させていただきますので、まずは国語の全国と比較して良好な結果を示していた問題について説明していきたいと思います。まず中学校の国語です。中学校の国語の 15 ページ、2 の問題です。これは、知識・技能、言葉の特徴や使い方に関する事項を観点とした問題であり、例えば文の精度、節とか各語句の機能的分類、そういったものの順番や、照合といって、いくつかの文、文と文を対応させるというようなことについて理解しているかどうかを問うています。これについては、比較的良好な結果となっております。続いて、中学校国語の 21 ページ、3 の問題です。これは知識・技能、我が国の言語文化に関する事項を観点とした問題で、かなりポイントが高かったというような問題にはなっておりますが、行書の特徴を理解しているかどうかを問うています。中学校の問題の中で比較的、かなり全国平均よりも正答率が高かったという問題になっています。

説明しながら、聞いていただいても結構です。でもそんなに難しくありません。ちょっと読むのに時間がかかるものですから、よろしくお願いします。

続いて、逆に課題が見られた問題です。今度は、小学校に移りたいと思います。小学校の国語の 5 ページ（1）、これは知識・技能です。言葉の特徴や使い方に関する事項を観点とした問題であって、話し言葉と書き言葉の違いに気づくことができるか、そういったことを問うています。非常に状況を把握した上で、話し言葉と書き言葉の違いに気づくかどうかということが問われているというような問題になっています。続いて、小学校の国語の 2 ページの 1 の問題です。これは知識・技能の問題ですが、話すこと聞くことを観点としています。目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決めて伝え合う内容を検討することができるかどうか、そういったことを問うています。提示された資料や状況から判断する力を身につける、そういった力が必要になってきます。続いて、中学校に移ります。中学校の国語の 12 ページの 4 です。これは思考・判断、中学校では思考・判断・表現が少し苦手であるというような結果も出ていますが、それを観点とした問題であり、目的に応じて必要な情報に着目して、要約することができるかどうかを問うています。要約とは何かということだけでなく、目的に応じて要約をする力が必要となり、小学校からやはり積み重ねていくということが大切になってくる問題となっています。次に中学校の国語の 4 ページです。これも同じく思考・判断・表現、話すこと聞くことを関係とした問題です。資料を用いて、自分の考えがわかりやすく伝わるように話すことができるかどうかを問うています。会話の流れや発信者の意図を捉える力を身につける必要がある問題になっています。

次に、算数・数学について振り返ります。まず、良好な結果を示した問題を紹介いたします。中学校数学の 5 ページ、5です。これは知識・技能を観点とした問題であり、簡単な事象について確立を求めることができるかどうかを問うています。比較的簡易な問題になっています。続いて、中学校の 19 ページ、20 ページ、8です。これは関数で知識・技能を観点とした問題です。2つのグラフにおける Y 軸の交点について、事象に即して解釈することができるかを問うています。関数の知識もさることながら、問題の内容理解が必要であり、解答は選択式であっても、問題等の内容理解が非常に重要になっています。

続いて、全国の平均正答率と比較して、課題となった問題を振り返ってきたいと思います。今度、小学校の 13 ページになります。4（1）、これは式と計算、知識・技能を観点とした問題であり、除数が少数である場合の除数の計算をしっかりとできるかどうかということを問うています。実は、この問題では、正解は 900 という正答に対して、90 というような誤答が非常に多く見られました。 $540 \div 0.6$

$=5400 \div 6$ に通常はなるのですけれども、 $540 \div 6$ というように、小数点のみ変えて90として計算したと予想されています。次に、小学校算数の5、6ページです。2の(2)、これも式と計算知識の観点とした問題です。除数小数である場合の除法において、除数と商の大きさの関係について理解しているかどうかを問うています。50人より1多い、50より小さい組み合わせで回答した誤答が非常に多かったです。1人当たりの量が減ることで配るものが多くなるということは理解できているのですが、除数が小さくなることで答え、商が大きくなるのが理解できていないというようなことが予想されていて、あと商という学習問題について正しく理解できているかどうかということについて、やはり差があるということが考えられています。次に小学校算数の11ページ、3の(3)、これは図形の思考・判断・表現を観点とした問題です。玉の直径の長さで立方体の一辺の長さの関係性を捉えて、立方体の体積の求め方を式に表すことができるかを問うていますが、玉の直径の長さが立方体の一辺の長さと同じと捉えられない児童が非常に多かったということです。また、3.14を用いた式で表した児童は、立方体の体積の求め方を正しく認識できていないというようなことも考えられます。知識・技能が思考・判断・表現にも影響するということがわかる問題だと思います。続いて、中学校の数学の23ページ、24ページです。9の(1)、これは図形の思考・判断・表現を観点とした問題です。

筋道を立てて考えて証明することができるかどうかを問うています。証明が成立するための根拠を挙げているのですが、根拠が不足しているとか、そういう回答が多かったということになります。この問題は、全国的にも無回答の生徒の割合が多かった問題となっています。続いて、中学校の13、14、15、16ページの7(2)です。データの活用、思考・判断・表現を観点とした問題です。複数のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な用例を用いて説明することができるかを問うています。結論が成り立つための理由をデータの中から見つけ、説明する力が必要となりますし、証明の問題と同様に、データを読み取るだけでなく、論理的思考力も必要となる問題となっています。

ここまで、全国学力・学習状況調査問題を使って、本市の児童生徒の課題等について確認をさせてもらったわけなのですが、本市の子供たちが抱えている課題を、授業の中でどのように解決していくかが求められる中、どのような視点が必要なのかということを考えたいと思います。小学校では国語や算数とともに、知識・技能について課題があるということは、もう先ほど説明をさせていただきましたが、小学校の教員は1人で多くの教科を担当しているということ、それぞれの教科において育てなければいけない資質・能力、身につけなければいけない資質・能力をやはりはっきりとさせて、子供たちにとって、その力が確実に身につく、身につけた知識や技能をその教科だけでなく、他の教科や実生活の中で活用したり、関連付けさせたりする活動や経験が必要となっています。また、獲得した知識や技能を思考・判断・表現の場面で活用でき、更に深めていくというようなプロセスが非常に重要になってくるということで、そういったことを授業の中で取り入れ、実践していくというような授業改善を進めてまいりたいと思います。

続いて、中学校では国語や数学とともに、実は思考・判断・表現に課題があるということは先ほど申し上げたとおりなのですが、上がって毎時間というわけではないのですけれども、例えば原因と結果の関係を理解する、仮説を立てる、情報を整理する、結論を導くというようなプロセスを用いた授業展開を行って、論理的思考力を育成したり、なぜそうなのかというような批判的な思考を促す、そして多角的視点を持たせるというようなこと、自分の思いや考えをアウトプットすることで、自分で判断や選択する機会を増やしたりしながら、思考・判断・表現の課題解決に向けて授業構成をしていく必要があるのではないかなと感じています。

そのようなことを踏まえて、本市教育委員会では授業改善テーマを「学び込む」とさせていただいて、教師が知識や情報を伝達する一方的な授業から、子供自身が学んで、子供同士で学ぶというような授業への転換を目指しているところです。また、教師の説明を聞いて覚えるというような授業から、子供自身が自分でやってみる、覚えたことを使ってみるというような授業を目指しているところです。

「学び込む」をテーマに取り組んできた授業改善も、少しずつですが浸透しつつあります。このスライドのとおり、全国紙にも取り上げられるようになっておりますし、市の内外からも本市の授業を見させてほしいと言われるようなことも増えているところであります。

ここまでの、教科に関する調査の振り返り、本市の児童生徒の状況ということで説明をさせていただきました。

次に、教科の調査と合わせて、生活等に関わる質問紙調査も行いましたので、質問紙調査から見える児童生徒の表れについて、お話ししたいと思います。まずＩＣＴ機器の活用状況です。授業でＩＣＴ機器をほぼ毎日使用すると答えた児童生徒の割合は、小・中学校ともに全国と比べ、非常に高い数値となっております。これはかなり高い数値となっております。ＩＣＴの活用については小・中学校とも進んでいる状況ではないのかなと思います。そして、ここでお知らせと言いますか、令和７年、来年の全国・学力学習調査では理科を実施するのですけれども、ＣＢＴといって、全てパソコンを持ち込んだオンラインで実施する形になります。その他の教科については、順次実施していくということですね。紙ベースでの調査が、今後、なくなっていくということも分かっています。

続いて、授業の中でＩＣＴを活用することで実感することとして、とてもそう思う、そう思うと回答した生徒の割合は、やはり非常に高いという結果になりました。自分のペースで学べる、すぐに調べられる、協力して学習ができるなど、多くの児童生徒がＩＣＴを学習で使うことで効果があると感じているところです。特に中学生の数値が高いものが多く、ＩＣＴの有効性を実感できているのではないかなと思います。ただ、回答をととてもそう思うということだけに限定すると、項目間でちょっとやはり差が見られて、ここだけは突出して高いのですけれども、やはりすぐに調べられるということが一番感じているということが分かって、調べられるということだけではなくて、個に応じた指導や考え方を共有することで身につけたい資質・能力の育成に繋がりたいと考えています。タブレットがあるから、すぐにそこに飛びついてしまうというような、うがった見方をすると、そういうこともなきにしも非ずというようなことも、ちょっと言えるのかなと思います。ＩＣＴで活用できているのだけど、子供の実感としては、そこにツールがあるとすぐに頼ってしまうということもあるのではないかと思います。ただ、ＩＣＴは調べることでなくて、それぞれの学びを一旦止めて、例えば、今まではちょっとやめてとか言って、全体で共有するために、よく先生方が、一生懸命子供たちがやっているのにもかかわらず手を止めさせたりしたわけなのですけれども、そういったものがＩＣＴを使うことで、リアルタイムで共有をお互いにできるということもありますし、記録をしながら同時に共有ができるとか、そういうようなこともできますので、大量の情報を高速で扱うこれからの社会を生きるためには、絶対に資質・能力なのではないかなと思っております。ただ単に調べるツールというだけではなくて、さらにそこから一歩も二歩も進んだ資質・能力に高めていければと思います。

次に、本市スクラムスクール運営協議会で合言葉として取り組んでいる早寝早起き朝ご飯についてです。まずは早寝です。アンケートの聞き方は、毎日、同じ時刻に寝ているかという質問です。中学校は全国とほぼ同等の結果ではありましたが、小学校では実は１０ポイント以上、差があったという結果でした。少しこれをご覧ください。これは、全国学力・学習状況調査ではないのですけれども、小

学校2年生から5年生、中学校の1年生、2年生に対して、本市では標準学力調査というものを行っておりまして、そのi-c h e c kという調査の中でこういう調査があるのですけれども、これによると本市の子供は10時前に寝ている子供の割合が、全国と比較して非常に高いのです。同じ時刻に寝てはいないけれども早く寝ているということも捉えられるのですけれども、同じ時刻に寝ていないからイコール遅く夜遅くまで起きているということではないということが、この結果から早寝については良好であるのではないかと感じております。次に、早起きです。毎日、同じ時刻に起きているかという質問に対して、8割以上の児童生徒が、毎日、同じ時刻に起きているという結果となりました。小学校より中学校の方が、肯定的に答えた割合が多かったという結果でした。中学校3年生が小学校6年生で行った同じ調査の結果では90.7%であったものですから、中学校が今回96.3%ということで、良好な結果に少しずつ推移しているのではないかなということが考えられます。次に、朝ご飯です。毎日、朝食を食べるについてですが、小中学校とも8割以上の児童生徒が、毎日食べると回答しています。小・中学校とも全国と同様か、やや高い結果となっています。中学校3年生が小学校6年生のときに行った調査では88.1%だったものですから、この項目についてはちょっと数値が下がったというような結果になっております。次に、朝食を食べることと平均正答率の相関関係について説明いたします。毎朝、朝ご飯を食べる習慣のある児童生徒は、毎日食べる習慣がない児童生徒と比べて、平均生存率が高いことが分かり、やはり朝食の摂取と平均正答率の相関は、かなりあることが分かっています。ただ、全く摂らなくても非常に高いというような項目を示しているところもあるのですが、細かく見ていきますと少数の生徒3名が、毎日食べないのだけれど、突出して平均正答率が高いということも分かったものですから、それでちょっと上げているということが分かっています。全体としては、やはり朝食の摂取と平均正答率の相関関係は、かなり高いということが分かっています。

続いて、メディア利用に関することについてお伝えしたいと思います。これは、1日にどのくらいゲーム、コンピューター、携帯・スマホのゲームも含むのですけれども、1日にどれくらいゲームをするかという質問に対して、本市の児童生徒は全国と比較すると、1日2時間以上ゲームをすると答えた児童生徒の割合が非常に高いということになっております。そして次に、1日にどのくらいSNSや動画視聴をしているかという質問に対しても、ゲームと同じく、全国と比較すると1日あたり2時間以上、動画視聴をしているという児童生徒の割合が高いことがわかります。それでは、1日当たりのゲーム時間と平均正答率の相関ですけれども、明らかにゲームに長く関わる児童生徒の平均正答率は圧倒的に低く、1時間以内でコントロールできているというような児童生徒の平均正答率の高いものになっています。左が4時間以上ということでもう圧倒的に低いわけですが、右側の高い青色と緑色は全くしない、もしくは1時間未満という形になっている平均正答率が高いケースです。次に、1日にどのくらいSNSや動画視聴をしているかということと平均正答率の相関関係ですが、ゲームに比べて相関関係が見られないのですけれども、実は赤く囲んであるところですが、SNSや動画視聴も30分から1時間ぐらいで時間をコントロールできている児童生徒の平均正答率が、やはり一番高かったという形になっております。相関関係はないものの、やはり自分でコントロールしながらやっている児童生徒は、平均正答率が高いのではないかなということが分かります。

以上、全国学力・学習状況調査の振り返りとなります。

学習面と生活面について、まとめていきたいと思います。とにかく学習面では知識・技能が表面的な理解にとどまらないように留意すること、例えば、計算方法などの式の処理の方法のみを理解するのではなく、やはり計算そのものの意味理解まで授業の中で求めていかなければいけないということ。

それから国語ですが、例えば、国語で学習したことが生活の中や他の場面で活用できるようにする、そういったことも必要なのではないかなというところです。思考・判断・表現を育むためには必要感がある課題設定、いつもいつも教員から与えられてこれをやりなさい、これをしなさいというような授業では、やはりなかなか思考・判断・表現については身に付かないということになります。取り組みたくなる課題、そういった設定をして工夫された授業作りが必要なのではないかなと思っています。それから、ICTを活用することで、教科で身につけたい資質能力が結びつく効果的な利用について、推進する必要があります。これだけ活用されている、それだけではなく、もっともっと資質能力が身につくような使い方についても、研究していかなければならないということです。あと、生活です。整った生活習慣は、学校生活や学習の充実に繋がります。これは、もう明らかになっています。従って、SNSや動画視聴、ゲームなどのスマートメディア等の長時間利用が課題となっていますので、自律的にスマートメディア等と関わる自己管理能力の育成が必要です。家庭との連携も、今後、より一層必要となっています。この全国学力・学習状況調査の結果を、ホームページ等で保護者や地域に公表し、子供たちのよりよい学びに繋がるよう、今後も働きかけてまいりたいと思います。

以上で、全国学力・学習状況調査の結果についての報告を終わります。忌憚なく御意見をいただければ幸いです。ありがとうございました。

○御前崎市長（下村 勝） ありがとうございました。

ただいま古地課長から説明がありました分析結果等について、皆さんと協議等を進めたいと思います。私の考えの前に、まず皆さんの意見を伺ったほうがいいかなと思いますが、どなたか、何か御意見が、御質問も含めて、ある方がいらっしゃいましたら、挙手をお願いします。

増田委員。

○教育委員（増田克之） 私は、退職して大分たちますけれども、昔と比べると、現職のときと比べると、この問題、読む力が必要だなと強く感じました。やはり、私も実際、授業をやっていて、昔は単元のテストというものがあったのですが、そんなに難しい問題ではないのですが、その中でも読み込めていない子がいて、ちょっと説明してやると、なんだ先生、そんなこと聞いているのかという答えが返ってきたことがありました。これを見させていただくと本当に、読む力がないとやっぱり答えることが難しいなというのを感じました。感想ばかりですいません。

あと、質問ですけれども、特に小学校ですけれども、この結果や課題を見させていただいて、やはりだんだん教科の特性っていうものも出てきているのではないかなと思います。その中で、高学年の教科担任制というものを事務局としてどのように考えていくか。やはりいろんな教科をやっていると、専門外の教科をやると、どうしてもその教科の特性に沿った学習というのがおろそかになる場合も出てくるのではないかなと思います。ですので、高学年の教科担任制というものをどのようにお考えか、少し教えていただければありがたいなと思っています。

○御前崎市長（下村 勝） 教育長か学校教育課長をお願いします。

○学校教育課長（古地 隆） よろしいでしょうか。ありがとうございます。

教科担任制については、やはり全国的に小学校でも進めていきたいということで、県のほうから、例

えば、教科担任制に向けての加配、基本的な職員配置プラス教科担任制の加配をいただいています。ただし、全てではありません。当然、予算等もあるものですからね。そういったことを活用して、例えば、算数の中学校免許を持っている小学校教員が教科担任制として配置されたとするならば、その先生が、高学年の算数・数学を全て持っておりまして、指導していくというようなこともありますし、やはり教科担任制の方が、より効果的な、その教科で持っている本質に迫れるような授業が専門と言ったらおかしいですけども、そういったこともあるものですから、小学校のカリキュラムの工夫によって、これは結局、小学校の先生でもいろいろな教科の中学校の免許を持っている先生がいますので、例えば6年生に美術ばかりを持っている先生だったら、なかなか組み替えてできないということもあるのですが、その中でもやはり得意な教科であったり、苦手な教科だったりすることもあったりするものですから、カリキュラムによっては学年によって数学は数学、あと理科は理科というような形で、少しずつ、今、進んでいるところです。ただ、どうしても全ての学年で教科担任制を専門的に行えるだけの人数といったことが保障されているかというところではないものですから、事務局としてできることは、スクラムで、幼保小中でいろいろな研修を行っていますのが1つですし、あとは今後、やはり小学校から中学校、中学校から小学校というような人事配置で、より一層、小学校は中学校のことの理解、中学校は小学校のことの理解ということも進めていかなければ、中長期的に見てそういうこともやっていかなければいけないのではないかなと考えております。これからますます進んでくるはずですよ。よろしくお願いします。

○御前崎市長（下村 勝） ありがとうございます。増田委員から問題の複雑さの話がありました。確かに、私も見ていて、自分たちが子供のときにやった内容とちょっと違っていて、やっぱり思考力、判断力というのが確かに入っているなという感じは受けます。この辺をうまく教育の中に生かしていくということに関して、何か、御質問、御意見が、追加でもしありましたらお願いいたします。

○教育委員（馬淵香澄） 思考・判断・表現は確かに必要ですが、まずは知識と技能が備わっていないと、そちらの思考とかのほうに身につかないという問題が多分あると思うので、どうしても比例して結果があるとなっているのではないかと思います。近年は、対話とか、そういった授業が多くて、思考とか重要視した授業があつて、とても良いと思うのですが、その中でもやっぱり基本を身につけるのも大事なのではないかなと思いました。

あと、問題量が普段のテストと違って多くて、実際に子供たちもテストはもう時間が足りなかったと言っている子が多くて、やっぱりこの読む力、増田委員が言っていたように、読む力が必要ではないかなと思うし、あと、知識がちゃんと身につけていないと、ちょっとやる気を失うじゃないですけど、ちょっとこの量だと余計につらいのではないかなと感じました。

○御前崎市長（下村 勝） 御意見ありがとうございます。実は、私も同じようなことを感じていましたね。大学の教員をしていたんですよ。大学の入試問題なんかを考えるとあの考え方に近くなっちゃっているんですね。だから、正直言うと、もう本当に、全員にこれを求めていくのは、確かに酷な感じがしますね。ただ、そのところに、でもみんなに向かっていきましょうというそのスタンスは、文科省が総録を見ているのでそれは受け入れたとしても、今、馬淵委員さんがおっしゃったように、基礎力をつけていくってところは本当に大事だと思います。それがあつて初めてその一歩先に行けるのだ

なというのは、それはそのとおりかなと私も感じているところです。最終目標が思考力判断力というところであったとしても、基礎力はおろそかにはしてはいけないという感じは、どうでしょう、皆さん。それはそうですね。一足飛びにはなかなか行けないので。

ほかに何か。竹田委員、どうぞ。

○教育委員（竹田和世） 国語なのですが、国語力は、本当にやっぱり一朝一夕には身につけられないということがあって、幼稚園で遊び込む子ということを、今、していますけれども、もちろんそれは大事なのですが、幼児期から語彙を豊かにしていくってということもすごく大事なかなと思います。読み聞かせをたくさんして、この時期に本当に本好きな子供を作っていく。その中でどういう場面でどういう言葉を使っていったらいいのかっていうのもだんだん身につけていけると思いますし、それから、幼児とか低学年の子が友達同士で暴力を振るうのは、言葉で表せないから手が先に出てしまうので、その思いを伝える言葉を、やっぱり幼児期に積み重ねていくことが大事じゃないのかなと思います。絵日記だとか、感想文や作文であるとか、その教科書の物語の主人公の気持ちであるとかという、そういう自分の思いを書く作業を、もう少し取り入れてもらっていったらいいのではないかなと思いました。

それから、数学についての数と計算、その辺は小学校よりも中学校の方がよくなっているというところはあるのですが、これは例えば、文字式や方程式、簡単なところは分数なんか使わなくてできるよとか、そういう問題感もあるかと思うものですから、一概に小学校のときは計算ができなかったけど、中学になったらすごくできたねというものでもないような気もするのです。やっぱり小学校のときからの学年ごとのレベルをちゃんとしっかり身につけていかないと、例えば、九九が苦手という子は、将来的にもずっとそういうところは見られるので、やっぱり学年ごとにしっかり身につける力は、一度つまずくと戻れないので、そこはしっかり基礎学力を身につけていかないといけないのではないかなと思います。図形もやっぱり問題を理解するための読解力とかが、すごく関係すると思います。数学的な感覚というのかな、それを磨いていくって難しいですけど、それが必要なんじゃないかなと思いました。

今、学校訪問をさせていただいて、その主体的対話的授業、グループで話し合うとか、そういうのがすごく進んでいるなというのは、もう目に見えてわかることで、とてもすごいことだなと思っています。これを見ると、ICTの活用って御前崎市、すごいですよね。2019年にGIGAスクール構想ですか、1人1端末ということで、私は、御前崎市って都会の子と比べてどうなのかしらって思ったのですが、そこもすごく都会に劣らず、本当に浸透させていただいて、支給させていただいて、文房具のように子供たちが使えているっていうのは、すごく先生たちがちゃんとレクチャーしてくださった。私の小学生の孫がいるのですが、初めて端末が来たときには10分間でいくつの単語をタイピングできるかとか、そういうのをすごく興味深くゲームのようにして、黒板にも誰々さんは何個できたよというのを掲示したりして、とても本当に子供がすんなりとChromebookに向かっていけるような、そういうレクチャーの仕方というのは素晴らしかったと思います。ただ、今後は、それを授業のどの場面で使っていくか。確かに学校間でも使っている学校とあまり使っていない学校というのがあるって、その格差も気になりますけれども、どこで本当に必要なかというところも大事になってくるんじゃないかな。それで、1年生で自分の朝顔を育てているのをChromebookの写真に撮っている授業があって、それは、お花はすぐ枯れてしまうものだから、ここで自分が育てた朝顔がこんな

に綺麗に咲いた、大きく咲いたというのを写真に撮っておけるっていうことは素晴らしいと思いました。でも、匂いとか手触りとか、それがどうかって言ったら、そこはやっぱりアナログのところだと思うのです。だから、デジタルとアナログをその現場でどういうふうに使っていいのかというのが、大きな課題なのではないかなと思いました。ちょっとこれは読んだものなのですが、東京大学大学院の酒井教授という方が、スマホとタブレットと手帳で記憶力を実際に研究した、その結果を見させてもらったときに、やっぱり短時間で記憶に残っているのは、手帳が一番だったということがあって、私がアナログ人間だから、それを見て安心したところは本当に非常に大きかったのですが、でもやっぱりデジタルとアナログのいいところ取りをしていくことを、これからは進めていかなくちゃいけないのではないかなということを思いました。9月22日の静岡新聞で、不登校の小・中学生が、メタバース登校をできるようにするのだということを知りました。小中学生の誰もが、タブレットに向かっていける。だからそういうメタバース登校ができて、そこで自分の居場所を見つけられることができれば、それはそれで本当に素晴らしいのではないかなと思いました。

それから、メディアのことですけども、やっぱり確かにゲームとかする時間が、御前崎市の子供がとっても大きいというのは、すごいショックでした。でも、昔に言った三無主義、無気力・無関心・無責任。では、無気力で無関心なのかというと、こんなにゲームに夢中になっている子がいるじゃない。決して御前崎市の子がそういうことなのではなくて、ちゃんと興味も関心もある子なのだと私は思いたいのですし、そんなときに浜岡中に放課後学習ルームという、これも数日前の新聞記事ですけども目にしました。これは中3生が校長先生に働きかけて、放課後にあるスペースを学習ルームに使わせてほしいと。だから、関心と気力、そういうものをこういうところに向けて行って、家に帰ってゲームするよりも友達同士で話したり、友達同士でわからないところを教えあったりするってこんなに楽しいということを実感して行って、これが中3生だけじゃなく、もっともっと広がっていったら、その関心とか興味という面をもっともっと違うところに子供を向けていきさえすれば、何かいい方向に進んでいけるんじゃないかなって、すごくこれは私が嬉しかったところです。だから何か希望を持てた記事でよかったなと思います。

それともう1つは、やっぱりネットリテラシーの問題、正しい情報をどこからどんなふうに使って行って、どんなふうに使うんだよというネットリテラシー教育は、段階ごと、子供の年齢に応じてやっていていただきたいなと思いました。以上です。

○御前崎市長（下村 勝） 盛りだくさんですね。全部を追いきれるわけではないのですが、ICTの件も、私もすごく大事な部分だと思うのですけれども、ICTという言葉はすごく使いやすいというか、簡単に喋れてしまう言葉なので、ちょっと気をつけなきゃいけないなと思っているのは、ICTを使えることと、ネットを見られることと、プログラミングができることとは、かなりレベルが違うんです。ICTを使えるっていうのは、もう小さい子供でもできてしまう。だけど、ICT機器を使うというよりも、そこで何か情報を引き出してそれを整理するとか、あるいはその先、一歩先に行ってロジカルシンキングをちゃんとしてプログラミングができるとかいうところは、だいぶ劇的に違うレベルのことだと思っていて、今、御前崎の小学校の子供たちがどこら辺のレベルにいるのかというのは、ちょっと知りたいなという気持ちがあります。なので、近くのネットから情報を引き出してくるところまではやっているのだけど、それをちゃんと整理できているのかとか、1個の情報だけを引っ張ってきて、それを全部信用してしまっているとかね。そこはちゃんと見た方がいいかなというのは思いまし

た。

もう1人、何かその辺の情報があったらお願いします。

○学校教育課長（古地 隆） ちょっとアンケートでもお示ししたとおり、文房具のように使うということで、本当に身近です。だから壁がないといいますか、そういったことはできていますが、先ほど市長がおっしゃったとおり、それをさらに活用して、自分の学力や知識を高めるために、思考力を深めるためにといったときに、本当に活用できているか、そして我々大人が活用させられているかということについては、やはりまだ課題があると感じています。

○御前崎市長（下村 勝） ちょっと前に、私が教育委員だったときに、東小だったかな。どこかの小学校に行ったときに、小さい子がもう結構ちゃんとScratchというプログラミングをやっていて、この子たちが育っていったら、すごくアプリをどんどん作るようになるんじゃないかなと思ったのですが、それは、その後はどんな感じなのでしょう。

○学校教育課長（古地 隆） 結局、ソフトがあって楽しむレベルと言ったらおかしいですけど、簡単にプログラムして音が鳴る、ゲームがちょっとできるかとか、そういうような形からさらに一步踏み込んでというと、まだちょっと弱いというか、そういったプログラムはされていないですね。

○御前崎市長（下村 勝） 何かアプリを作ったりするのって結構面白くて、私も小学校のときにパソコンを1台、人から借りてきて、とてもはまってやっていたときがあったのです。やっぱりそこで論理的な思考とかってというのは、多少、勉強になったような気がしているので、やっぱりそういうところに一步、壁を越えて何かクリエイティブな方向に行くといいなという気もしますが、確かにそういう知識を持った人が近くにいる、それを教えてあげるとそういうところまで行くのかな。

○学校教育課長（古地 隆） まだまだプログラミングであったりとか、そういったところについては各学校で本当に熟成されているかという、そうではないという感じです。

○御前崎市長（下村 勝） みんながみんな、そういうことに興味を持つとは思えないので、何か興味を持った子たちが集まって、それを地域の人で詳しい方がいますので教えてくれたりすると、一步先に進めるかもしれません。

○学校教育課長（古地 隆） 確かに、特別支援学級の知的学級の子供たちも、本当に興味を持って、夢中になって取り組む姿を見たことがあるものですから、そういったプログラムで。効果的だなと思う反面、ちょっとやっぱり、ただゲームをちょっと動かしたいというそれだけで終わってしまっているという。そういったことをどう繋げていくかというのは、やはり課題ではないかなと思っています。

○御前崎市長（下村 勝） そのほか、何か御意見よろしいでしょうか。島田委員、お願いします。

○教育委員（島田恵美） 学調の資料を見させていただいて、学調を行う意味って何かないと、ちょっと調べてみました。インプットの改善と教師のアップデートということがちょっと調べたら出てきて、すごく納得したのと、それを踏まえて、この学調の問題がすごくいい問題だなと私は思ったんですよ。

○御前崎市長（下村 勝） すごく考えられていますよね。

○教育委員（島田恵美） 考えられていて、何か思わずそこでスイッチが入っちゃったように、調べに調べまくってしまって、すごくいい問題だと思って、この細かい問題をちょっと解いてみたりとかしたのですけれども、何か私たちがやろうとしていることが、全てこの問題に入っているというのを感じて、ちょっとすごい感動をしてしまいました。赤字でも、この資料に細かく書いてくださってありますけれども、本当に知識・技術、思考力・判断力というのが組み込まれている問題だなと思いました。私も竹田さんと一緒に、特に国語の問題なんか素晴らしいと思いました。

○御前崎市長（下村 勝） 課題解決のための問題なんですよ、感性を磨くための。

○教育委員（島田恵美） そうなんですよ。本当にここ最近、教育委員会で話すのですけれども、数字の結果ではなく、こういう問題がこれからの社会を作っていくのだなとすごく感じました。御前崎市の授業改善のテーマが「学び込む」ということも、これも素晴らしいテーマだと思うのですが、何かこれがイコール、メタ認知に関わる力だになっていうのもすごく思って、小学校の高学年から中学生にかけて急速にメタ認知能力というものが発達するということを聞いて、改めてこの重要性というのを感じました。学校訪問とかに行っても、ちゃんとこのトレーニングをやっているのですよね。自己評価のシートの活用とか、協働学習の他者から学ぶ、あと、授業のノートの共有というのも中学校はかなり進んでいるのですけれども、小学校でも土台がもうできているというところが素晴らしいなというのを、資料を見ながら改めてもう1回復習したという感じなのなのですが、思いました。

10年後、15年後っていうのは、未来はわからないのですが、先ほどもお話があったように理科のテストはC B T活用するとか、早いスピードで進んでいきますけれども、こういう可能性を秘めた子供たちが成長するという姿は楽しみでもあるなということで、何か今回は前向きに考え方が変わった感じがしました。

○御前崎市長（下村 勝） 文科省が、なぜこういう方向に進んでいるかという大きなものの理由は、A Iが言っていることを人間が信用できるかどうか、ちゃんと判断できるかどうかというのが一番根っこにあると思うのです。なので、A Iで出てきた答え、A Iが出した答えが、これは本当にいいのか、正しいのかということをちゃんと人間が見抜くというところが、その力が、こういう問題の可能性を持たせているのだらうなと思います。そういう子が増えてくれば。全員にはならないと思うのですけどね。

○教育委員（島田恵美） そうなのですよ。

○御前崎市長（下村 勝） いや、あいつは違うぞということを誰か気づけるような、そういう世界に

なっていくことが必要だとは思いますが。

そのほかに何か御意見はございますでしょうか。

○教育委員（松林義樹） ちょっと質問を含めてですけど、小学校の課題として知識・技能がちょっと劣っていたよというような話があったのですが、それっていうのは、ここ数年の課題なのですか。それともこの年のことですか。

○学校教育課長（古地 隆） 違います。ここ数年です。トータル的に考えたときに、小学校6年間、中学校3年間を考えていったときに、やはり傾向として少しずつ階段が上がっていくようにその差が縮まっていくというのは、もう長年、そういう傾向にあります。

○教育委員（松林義樹） 小学校も思考・判断・表現のほうが大きな課題かなと私は思っていたのですが、知識・技能というのが出てきて、あれって思ったのですが、そうなってくるとやはり自分の課題を設定して、それに向けて友達やICTなどを使って調べて課題解決していくような授業が非常に推奨されているのですけれど、それと同じくらい基礎基本というのですか。それをきちんと押さえる時間も大事になってきて、それがないとなかなかその上には繋がっていかないという、そういう御前崎市の子供たちの力が、まだそこまで至っていないのではないかなというようなこともすごく感じてしまいます。本当に昔から言われた読み書きそろばんではないですけど、漢字だとか、計算問題だとか、そういうものを繰り返しやって覚えていく。または、苦手なものでも継続的に取り組んでいくだとか、そういったものを何か教員が押さえて指導していく時間を設けてあげないと、なかなか知識・技能の課題解決に向けてというところの、そういう力を育てていくには、ちょっとこのままの方向でいいのかなっていうようなことを感じます。または能力の高い子たちには、学び込む、子供自身の学び、子供同士の学び合う授業だとか、自分でやってみる、覚えたことを使ってやる授業だとかということは、非常に理想的な目標でいいと思うのですけれど、そこに至っていない子たちの力をつけていくことも、これだけ毎年、全国平均から下回ってしまっていると、やっぱり必要になってくるのではないのかなということをちょっと感じてしまいました。感想ですけどすみません。

○御前崎市長（下村 勝） 積み上げ式ですね。下がちゃんと積まれていないとクラスをいっぺんに見せようとしても、なかなか難しいですね。

○教育委員（松林義樹） 何十年も奈須先生に来てもらって、授業改善ということで進めてきているのですけれど、御前崎市の教員ってすごく真面目で、この奈須先生の授業を目指して取り組んでいると思うのですよね。いると思うのですけれど、なかなか成果としてね。

また、この学調に限ったことなのかもしれないですけど、結果が出ていないということは、何かどこに課題があるのかな、何にもうちちょっと力を入れなくてできないのかなということを、御前崎市の学校全体で検証していくというか、進めていかないとできないのではないかなと感じてしまいました。

○御前崎市長（下村 勝） ありがとうございます。どうでしょうか。そのほか何かございますか。よろしければ、協議はもうないということでよろしいですか。

○教育委員（竹田和世、島田恵美、松林義樹、馬淵香澄、増田克之、松下充利）

〔ほかの意見や質問は特になし〕

○御前崎市長（下村 勝） ありがとうございました。それでは以上で本日の会議を終了といたします。進行を事務局にお返しします。

4 閉 会

○教育部長（鈴木弘康） ありがとうございました。

協議の場におきましては、様々な御意見をいただきましてありがとうございました。それでは以上をもちまして令和6年度第1回御前崎市総合教育会議を閉会とさせていただきます。

なお、第2回を令和7年2月28日、金曜日、午前9時から予定しております。また御案内は改めて通知させていただきますが、御承知おきいただきたいと思います。

それでは、最後に挨拶を交わしたいと思いますので、御起立をお願いします。相互に礼。

〔相互に礼〕

○教育部長（鈴木弘康） ありがとうございました。